

奏



大阪国際室内楽
Osaka International Chamber



Music Competition & Festa
大阪国際室内楽コンクール&フェスタ

Osaka International Chamber
Music Competition & Festa



2017 AUTUMN Vol.48





過去最多。世界37カ国239団体の応募から選ばれた室内楽の精鋭たちが大阪に集い、競いました。

「第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」

2017年5月13日(土)～21日(日) いずみホール 披露演奏会 5月22日(月)いずみホール/23日(火)東京・トッパンホール



主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団 後援：外務省、文化庁、大阪府、大阪市、関西経済連合会、日本演奏連盟、いずみホール、OBP協議会、読売新聞社
協賛：イオン1%クラブ、岩谷産業、大阪ガス、鹿島建設、きんでん、サントリーホールディングス、住友生命、ダイキン工業、東芝、日本たばこ産業、ハウス食品グループ、非破壊検査、フジテック、JR西日本 賛助：読売テレビ

第9回 大阪国際室内楽 コンクール&フェスタを振り返って

座談会

風薫る五月。いすみホールにおいて「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」が開催されました。今回は史上最多の二百三十九団体から応募があり、厳選な審査の結果、三十四団体が出場することになりました。世界でもハイレベルと評される当コンクールに出場したタレイア・カルテットのみなさんと審査委員として参加して下さった東京藝術大学学長である澤先生にお集まりいただき、東京藝術大学学長室でコンクールの感想などについてお伺いし、大いに盛り上がりました。



左より澤和樹さん、石崎美雨さん、大澤理菜子さん、山田香子さん、渡部咲耶さん、玉越邦彦さん

このコンクールの長い歴史の積み重ねが大きな美りになってきている。

——澤

玉越 本日は「第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の第一部門、弦楽四重奏の部に出場したタレイア・カルテットの皆さんと、審査委員の澤先生にお話を伺いたいと思います。まずは、感想からお願います。

山田 大曲を四人で仕上げているのは大変でしたが、とても素晴らしい経験になりました。



山田さん

本番はもちろんのこと、プロセスも貴重な経験でした。世界中から集まった優秀なカルテットから集まった優秀なカルテット

トの演奏から学ぶことも多く、日本にいながらにして世界中の音楽が聞けるのは素晴らしい体験だと感じました。

大澤 国際コンクールには特別な緊張感があつて、非常に体力や気力を使いましたが、海外のカルテットとも交流でき、良い経験になりました。審査委員の方々からの講評も非常に有り難く参考になりました。



大澤さん

渡部 コンクール前後では自分たちのモチベーションもかなり変化しました。他のカルテットの演奏法を参考に試してみたりするなど、いろんな面で勉強になりました。

石崎 海外の演奏家のパフォー

ませんでしたか？

渡部 順番の早さだけでなく、全てに緊張しました(笑)。

石崎 他のグループの練習の音にも緊張しましたね。

その会場の響きに合わせて演奏するということは重要でしょうね。

——玉越

玉越 イギリスでの演奏など、様々な経験をされていると思いますが、当コンクールでの演奏が良い経験になったのであれば嬉しいですね。ところで、先ほど澤先生がカルテットはある程度経験が必要だとおっしゃいましたが、今回、みなさんそのことを実感されたのではないのでしょうか？

渡部 そうですね。あんなに大きなホールで弾いたのも初めてでしたし、リハーサル中に学んだことも多かったです。

山田 響き方が違うのでフレーズの語尾というか、そうした部分の音が聞こえないので、もう少しハッキリ弾こうとやり直したりしました。そういう発見がいろいろありましたね。

渡部 参加要項に「残響時間」というのがあって、なんだろうと思うんですが、そういうことかと実感しましたね。

玉越 やはりホールのサイズの影響は大きいですか？

澤 そうですね。今回もホールのサイズを戦略的に生かしたグループと、意識していなかったグループがありました。私も澤カルテットを結成して二十五年以上となり、数百回演奏していますが、毎回ホールの響きが違うため、その都度ゲネプロで誰かが聞きに行つて表現方法の調整をします。そうしたことは経験の積み重ねでできるように思いますよ。



澤さん

玉越 一般的に室内楽をするのは五百人位のホールが多いと思いますが、いすみホールは八百名以上。そういう面では難しかったかもしれませんね。

山田 私たちがいつも練習しているのは狭い防音室なので、

マンスは、私たちの想像を超えたものがあつて、非常に良い刺激になりました。様々な曲にチャレンジするきっかけにもなりましたし、本当に参加できて良かったと思っています。



石崎さん

玉越 では、澤先生には七団体が出場した第二部門の感想をお伺いしたいと思います。

澤 審査委員というよりも、一聴衆として素晴らしい演奏を楽しんだという感覚がありますね。弦楽四重奏は同じメンバーで長年やってこそ良さが出ると信じていましたが、入賞したグループの結成がわずか二年と短かったことに驚きましたし、若い人たちがこんなにも熱心に弦楽四重奏に取り組んでいるのを目の当たりにしたのは喜ばしいことでした。そして、全体的なレベルの高さに感心する



渡部さん

一週間程、合宿をして練習しました。

山田 密度の濃い練習は初めてで良い経験でした。そして、今回の演奏曲がレパートリーに加わったのも良かったです。

玉越 演奏順が早く緊張し

PROFILE

敬称略

【玉越 邦彦】(司会)

「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」プロデューサーを1999年開催の第3回から第9回まで20年間担当。

【澤 和樹】(東京藝術大学学長)

1979年、東京藝術大学大学院音楽研究科修了。ロン=ティボー、ヴィエニャフスキ、ミュンヘンなどの国際コンクールに入賞後、ヴァイオリニストとして国際的に活躍。東京藝術大学音楽学部教授、音楽学部長を経て、2016年4月より東京藝術大学学長に就任。英国王立音楽院名誉教授。

【タレイア・カルテット】

2014年東京藝術大学在学中の現メンバーにより結成。ザルツブルク=モーツァルト国際室内楽コンクール2015第3位。2016年次ホール弦楽四重奏コンクール第2位。2016年イギリスにて開催の湖水地方音楽祭に参加しイギリスでのデビューを果たす。その後大阪はじめ国内外のコンクールに挑戦するなど意欲的に活動を行っている。

【山田 香子】(ヴァイオリン)

4歳よりヴァイオリンを始める。静岡県学生音楽コンクール第1位・静岡県室内楽協会コンクール第3位。全日本学生音楽コンクール東京大会高校の部第3位。全国大会入選。日本ヴァイオリンコンクールAge-Gの部最高位。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校、同大学を経て、現在同大学院2年在学中。

【大澤 理菜子】(ヴァイオリン)

4歳よりヴァイオリンを始める。日本クラシック音楽コンクール高校の部第3位。全日本学生音楽コンクール東京大会高校の部第3位。全国大会入選。日本ヴァイオリンコンクールAge-Gの部最高位。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、現在同大学院1年在学中。

【渡部 咲耶】(ヴィオラ)

5歳よりヴァイオリンを始める。東京藝術大学入学時にヴィオラに転向。卒業時に同声会賞受賞。現在同大学院2年在学中。第3期サントリーホール室内楽アカデミーのフェロコンクール井上賞。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京芸術大学音楽学部卒業時に同声会賞受賞。

【石崎 美雨】(チェロ)

8歳よりチェロを始める。泉の森ジュニアチェロコンクール高校生以上の部銀賞。全日本学生音楽コンクール東京大会本選フェロコンクール部第3位。ビバホールチェロコンクール井上賞。東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京芸術大学音楽学部卒業時に同声会賞受賞。



1次予選で演奏するタレイア・クアルテット

互いの音が聞こえやすい状態。広い場所ではそうした感覚も違いますし、どう聞こえている

のかが気になりますね。

玉越 コンクールによつては、予選は小さな会場で行い、本選は大ホールというケースもあります。その会場に合わせて演奏することは重要なことですね。審査委員のコメントはどんな印象でしたか？

石崎 もっと自由で良いとか、テンポが一定すぎるとか、全員が同じように弾き過ぎだから、もっと一人一人のアピールがあつても良いなど、本質的な部分を指摘されたと思います。

玉越 そうした部分は、演奏者にとつては永遠のテーマなのかもしれないですね。

澤 クアルテットは四人の調和が重要ですが、一人一人の演奏者の個性も生かさないといけない。非常に難しいことですが、それができると素晴らしい演奏

になると思いますね。今回のコンクールでも、アメリカの団体は一人二人の主張がぶつかり合いながらもまとまりがあつて、とても修練されているように感じました。タレイア・クアルテットは、まとまりが良いけれど、もう少し丁々発止の部分が加わると面白くなると思いますね。

玉越 日本人は教科書通りの演奏になりがちというか、そうした印象が強いですか？

澤 そうですね。今回、演奏曲を自由に選べる三次予選において、アメリカの団体の選曲は現代曲が多かった。それも作戦勝ちの要因だったように思います。よく知られている曲に対して



玉越さん

す。これからは日本の作曲家の曲にも積極的にトライしていきたいですし、今回の経験を生かして様々なコンクールに挑戦していきたいですね。

玉越 女性ならではの良さは必ずありますから、それを生かして頑張ってくださいね。特にみなさんは同じ学校で学んだ仲間。そうした点も大きな強味になると思いますよ。



玉越さん

山田 そうですね。これからのいろんなことがあると思いますが、できる限り四人で続けていきたいと思っています。

渡部 スペシャル・コンサートで演奏されていたクアルテット・エクスセルシオの大友さんが「僕たちはクアルテットを続けていくことを目標に頑張ってきた」といわれていたのが印象に残っています。

玉越 続けることは、本当に大切ですよ。では最後に、澤先生の審査委員としての視点か

しては審査委員それぞれが自分なりのイメージを持っていきますから、どうしても点が辛くなることもあります。そうしたことも影響したかもしれませんね。

玉越 なるほど、そうした作戦も必要ですね。全体のプログラムの中で、一番自分たちの個性をPRできるのが三次予選ですが、みなさんの選曲のプロコフィエフは何か意図があつたのでしょうか？

山田 あまり知られていないけれども、みんなが好きな作曲家なので選びました。

渡部 課題曲には入っていませんでしたね。

玉越 確かにあまり演奏されない曲かと思いますが、楽しんでいました。レパートリーをどんどん増やして、自分たちの演奏を最大にPRできる曲をたくさん持つておくことが大切なことなのでしょうね。澤先生は、演奏を聞けば経験の長いクアルテットだとわかりませんか？

澤 ある種の曲を聞けばわか

らコンクールの印象をお願いします。

澤 平日の昼間でも良い具合に観客が入っていて、ファンが根付いているように感じました。

玉越 平日の昼間は学生や働いている人は来場できないので、観客の年齢層は高いです。でも、なんとか若い観客も増やしたいので、ライブストリーミングも実施しています。アクセスは前回より四倍程上がったんですよ。新しいことを取り入れながら、伝統的な音楽を守っていきたくて考えています。

石崎 ライブストーリーリング、すごく良かったです。演奏が終わつてすぐにYouTubeで自分たちの演奏もチェックできました。これからは是非続けていただきたいと思います。



ら。今回は第一部門は、本来十団体参加だったのに、キャンセルがあつて七団体だけの参加になったのは残念でしたね。

ることもありますが、今回は二、三年目のクアルテットが良い成績だったので一概にはいえませんが、

玉越 当コンクールも運営内容を考えるなど、チャレンジを繰り返していますが、参加者もそれぞれにチャレンジしながらの参加だと思

います。演奏家にとつて、チャレンジはとても重要な要素だと思いませんか。それでは、みなさんには、みなさんには今後の抱負をお伺いしたいと思います。

石崎 これからもクアルテットを続けていつて、トロンハイムに引き続き、ウイグモアホールとかメルボルンなどのコンクールも受けてみたいと考えています。

玉越 是非、大阪での経験を

玉越 そうか、自分たちの演奏をすぐに確認できるんですね。

澤 運営自体もすごくスムーズでしたよ。さすが九回目の開催だなと感じました。

玉越 これまで、工夫しながら少しずつ改良を加えてきました。

澤 今回の第一部門は、本来十団体参加だったのに、キャンセルがあつて七団体だけの参加になったのは残念でした。今回は記念すべき第十回コンクールですので、更に工夫して良いものにと考えています。みなさん、本日は有難うございました。



👑 第2部門(管楽アンサンブル) 👑

管楽アンサンブルを対象とした第2部門は、木管五重奏・サクソフォン四重奏・金管五重奏の3ジャンルからなり、今回世界20か国71団体の中から、フランスを中心に各国トップクラスの団体(9団体)が参加し、ハイレベルの演奏を競い合いました。

第1位

クワチュオール・ザイール(フランス)

Quatuor Zahir (France)

ギヨーム・ベルソー： ソプラノサクソフォン
ソンドロ・コンパニオン： アルトサクソフォン
フロロン・ルモン： テナーサクソフォン
ヨアキム・シエスラ： バリトンサクソフォン



パリ国立高等音楽舞踊学院の学生4名が意気投合して2015年に結成。同院では、室内楽をラズロー・ハラディ教授の下で現在も指導を受けている。2016年4月のパリFNAPEC国際室内楽コンクールで入賞。今後の活動予定は、当コンクールでの優勝実績が認められ、2017年のシーズンをフランスとイタリアの音楽祭にて招聘されている。また今年11月には初のCDをリリースする。

優勝団体の声

コンクールに参加できるという連絡を受け取った時が夢の始まりでした。難しい課題曲が入っていたので、4か月間一生懸命練習しました。私達の先生であるハバナレ・サクソフォン四重奏団が、このコンクールで優勝していますので、その後が続くことができとても嬉しいです。

第2位

ニオベ・サクソフォン四重奏団(フランス)

Niobé Saxophone Quartet (France)

ジャン・グリカー： ソプラノサクソフォン
マキシム・バザーク： アルトサクソフォン
ウド・バーンシュタイン： テナーサクソフォン
本堂 誠： バリトンサクソフォン



ニオベ・サクソフォン四重奏団は2015年にパリ国立高等音楽院にて結成。同院のラースロー・ハダディ教授や、クロード・ドラングル教授など高名な指導者に師事。シャトレ座、パレド・トーキョー、スービーズ館、ルーマニア大使館などパリの主要なホールで演奏。2016/2017シーズンのコンサート出演にヤング・タレント・エージェンシーより選出されている。

第3位

クンスト・クインテット(ドイツ)

(2団体が入賞)

qunst.quintett (Germany)

アレキサンダー・コヴァル：フルート
ユリア・オバーグフェル：オーボエ
マーティン・フックス：クラリネット
ラファエル・マノ：ホルン
ヨハネス・フント：ファゴット



クンスト・クインテットは2010年にドイツ・ユース・オーケストラで知り合った5人の若い音楽家たちが出会って結成された。ユルゲン・ポント財団より奨学金を授与されたことによりドイツ国内でのコンサート活動が可能になる。第61回ドイツ連邦選抜ヤング・アーティストへ参加を認められ、2017/2018シーズンのコンサート活動が予定されている。

第3位

パリ・ローカル金管五重奏団(フランス)

(2団体が入賞)

Local Brass Quintet, Paris (France)

ジャヴィエル・ロゼット：トランペット
フランソワ・プティブレ：トランペット
ブノワ・コレット：ホルン
ロマン・デュラン：トロンボーン
タンクリード・サイマーマン：チューバ



パリ国立高等音楽院の卒業生5人により2015年に結成したパリ・ローカル金管五重奏団はフランスで最も活躍している金管五重奏団のひとつである。同年、公開コンクールで優勝し同学院の大学院、室内楽専攻に進む。2016/2017年のシーズンにおいてはフランス国内で有名なシェルジュール・ブラス・フェスティバルに招待され演奏。

グランプリ受賞団体

👑 第1部門(弦楽四重奏) 👑

室内楽の柱とも言われる「弦楽四重奏」をコンクール第1部門と定めていますが、今回は21団体の応募の中から選抜された7団体が出場しました。初めて3次予選が加えられ、ハイドン、モーツァルト等の古典から現代曲までの広いレパートリーを自分のものとして合計4回のステージで栄冠を勝ち取ったのは、次の3団体でした。

第1位

アイズリ・クアルテット(アメリカ)

Aizuri Quartet (USA)

アリアナ・キム：ヴァイオリン
三枝 未歩：ヴァイオリン
小笹 文音：ヴィオラ
カレン・ウズニアン：チェロ



日本人2名を含むアイズリ・クアルテットは、2012年に結成。団体名は鮮やかで繊細な日本の浮世絵様式の一つである「藍摺絵(あいずりえ)」より由来している。2015年ロンドンのウィグモアホール国際弦楽四重奏コンクールで第3位に入賞。ニューヨークを拠点とし、2014年から2016年までアメリカのカーティス音楽院のレジデントとして活動する。

優勝団体の声

私達にとって日本で演奏するのは夢でコンクールに応募しました。コンクールでは様々な楽曲を演奏することで自分たちを成長させることができ、本当に素晴らしい経験ができました。

第2位

ユリシーズ・クアルテット(アメリカ)

Ulysses Quartet (USA)

クリスティーナ・ブイ：ヴァイオリン
ライアナン・バナート：ヴァイオリン
コリン・ブルックス：ヴィオラ
グレイス・ホー：チェロ



2016年フィッシュ室内楽コンクールのシニア弦楽部門において、グランプリおよび金賞を受賞したユリシーズ・クアルテットは2015年夏に結成。2016年にはバンフ国際弦楽四重奏コンクールにおいてキャリア・デベロップメント助成金を受ける。近年はシュナイダー・コンサート、マイラ・ヘス・コンサートに出演する等、全米各地で活動を展開している。

第3位

ヴィアノ・ストリング・クアルテット(アメリカ)

Viano String Quartet (USA)

ルーシー・ウァン：ヴァイオリン
ホウ・ツォウ：ヴァイオリン
ジョアンナ・ノーウィック：ヴィオラ
テイ・ザワディョック：チェロ



ヴィアノ・ストリング・クアルテットは、ロサンゼルス・コルバーン・スクールにて2015年秋に結成。現在は、クライヴ・グリーンズミス教授の下で研鑽に励んでいる。また、アーノルド・シュタインハート、ゲイリー・ホフマン、エマーソンクアルテットのメンバー、オーパスワン、カリドール・ストリング・クアルテットにも指導を仰いでいる。

第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 総評

審査総評



コンクール審査委員長
堤 剛
(チェリスト・
サントリーホール館長)

先ず私が今回とても嬉しく思いましたのは、予選の時から、お客様の数がとても多かった事で御座います。このことは本当に、室内楽を振興するという当コンクールの目的にかなった事だと思ひ、ご来場頂きましたお客様に深く感謝申し上げます。今回のコンクールは第1部門・第2部門共に、大変高い水準を誇っていたと思います。第1部門で優勝したアイズリ・ケルテット、第2部門で優勝したクワチュオール・ザイールは、既にプロのレベルと言って良いと思います。日本からのグループも頑張ってくれました。惜しくも先には進めませんでしたけれど、これからもっとも努力し、頑張ってくださいと思います。

今回も世界のトップクラスの審査委員の方々には大阪までいらして頂き、難しい審査を一緒にして頂いた事を私としては大変嬉しく、また尊敬する仲間達と重要な仕事が出来たという事を感謝しております。このようなことを可能にしてくれました当コンクールは、民間のご支援により成り立っております。そういうことが出来たのは、商業都市として栄えてきた大阪の伝統なのではないかなと思っております。

今回入賞されたグループにとってこのコンクール&フェスタでの輝かしい成果が、皆さんの将来のキャリアにとって大きな助けになって欲しいと思っております。今回は9回目でしたが、1回目からの優勝者、入賞者のグループが本当に世界中で大活躍しております。今回の入賞グループにも益々の活躍をして頂きたいと思ひますし、我々としても出来るだけの支援をしたいと考えております。それによりまして、このコンクールの演奏レベルや知名度が益々上がりまじ、室内楽という部門を通じてですけれども、本当の意味で芸術振興や世界平和に貢献出来るのではないかと思っております。会場の皆様方にも大きなご支援を頂きますようお願い申し上げます。

フェスタの魅力



フェスタ審査員長
梅本 俊和
(ピアニスト・
大阪音楽大学名誉教授)

コンクールとフェスタ。ある意味では両極にある催しを一度にやってしまう試みは、おそらく世界にひとつしかないでしょう。

フェスタは祝祭日を意味し世界中の国で様々なお祭りが開催されています。その多くは宗教行事とも重なり、あらゆる種類の音楽が多彩に演奏され人々を楽しませます。

メニューイン卿(世界的ヴァイオリニスト、1916~1999)の提唱で始まったこのフェスタも9回目を迎え益々活況を呈し、世界32ヶ国・地域から147組の応募がありました。その内テープ審査を経て11ヶ国、18団体の人たちが来阪しました。出場人数だけは2名~6名のアンサンブルと制限されていますが、国籍、年齢、楽器、曲目等はすべて自由です。他方、注目すべきは聴衆審査です。約100名の一般聴衆(公募)が感動した演奏に1票を投じ、その票数で三賞が決まります。予選2日と本選1日は緊張しますが、皆さん異口同音に「楽しかった。」とおっしゃいます。結果、ロシアの民族楽器(ドムラとバヤンの2重奏)を演奏したデュオ・プロコピエフ・ダフチャンがメニューイン金賞に輝きました。

実はこの2人に大阪行きを勧めたのが第4回(2002年)に金賞だった、ロマノフ教授とクガエフスキー教授だった事を知り、とても深いつながりを感じたのです。両教授の演奏は今でも鮮明に覚えています。その卓越した技巧と鮮烈な音楽は確実に受け継がれていました。銀賞(デュオ・フュナンビュル/仏)はマリimbaとピアノの2重奏でした。曲はすべてピアニストの編曲したもので、クラシックとポピュラーの中間をゆく現代的なリズムと和声の魅力でした。銅賞(トリオ・エクリプス/スイス)はトリオの原曲を忠実に再現し、見事なアンサンブルを聴かせていました。お揃いの赤いポケットチーフとソックスが印象的な3人でした。フェスタの舞台は千変万化する音楽にあきることがありません。そしてそれこそがコンクールをユニークにしている最大の要素なのです。次回は是非、皆様もこのお祭りに参加されては如何でしょう。

👑 フェスタ部門(2名~6名のアンサンブル、楽器編成は自由) 👑

フェスタ部門は、年齢制限や課題曲のないコンクールで、楽器編成は自由のため、クラシック音楽はもとより、世界各国の民族音楽のアンサンブルも対象になります。今回は、世界32カ国・地域から147団体の応募があり、予備審査の結果、ピアノデュオや打楽器団体、ロシアやモンゴルの民族楽器を使ったアンサンブル等、多種多彩な18団体が参加しました。

メニューイン 金賞

(フォークロア特別賞
も受賞)

デュオ・プロコピエフ・ダフチャン(ロシア) アーチョム・ダフチャン：ドムラ(ロシアの民族楽器)
ニコライ・プロコピエフ：バヤン(ロシアの民族楽器)
Duo Prokopiev - Davtyan (Russia)



デュオ・プロコピエフ・ダフチャンはノヴォシビルスク市のグリーンカ音楽院で、第4回室内楽フェスタ(2002年)で優勝したデュオ・ロマノフ・クガエフスキーのアンドレイ・クガエフスキー教授に師事している。2010年のデュオ結成以降、シベリアの各都市で演奏活動を行っている。クラシック音楽の名曲や世界の民謡をドムラとバヤンのために編曲した作品を主なレパートリーとして活動している。

優勝団体の声

フェスタは世界に例を見ない音楽イベントだと思います。歴史あるこのフェスタで私たちの先生が15年前に金賞を受賞しましたが、私たちも今回優勝できたことがとても嬉しい。

銀賞

デュオ・フュナンビュル(フランス) トーマス・エンコ：ピアノ
ヴァシリナ・セラフィモヴァ：マリimba
Duo Funambles (France)



デュオ・フュナンビュルは2009年のフランスでのコンサートでデビュー。その後、ラジオ・フランスやクラシックとジャズのフェスティバル「ピアノスコープ」、ニューヨーク、レバノン、ドイツ、ブルガリア等フランス国内や海外でも演奏活動を行う。2016年4月にドイツ・グラモフォン/ユニバーサルより最初のアルバム「フュナンビュル」をリリース。

銅賞

トリオ・エクリプス(スイス) ベネデク・ホーヴァト：ピアノ
セバスチャン・ブラウン：チェロ
リオネル・アンドレイ：クラリネット
Trio Eclipse (Switzerland)



バーゼル音楽院在籍中に会った3名の音楽家が2015年トリオ・エクリプスを結成。トリオはアーデルホーデンでのスイス室内楽フェスティバルをはじめ、ラヴェル・スイス・フェスなどの様々なフェスティバルやコンサート・シリーズに頻りに招聘されている。2015年のオルフェス・スイス室内楽コンクールで2位に入賞。

コンクール関連事業と広報宣伝活動

日本室内楽振興財団では、コンクール&フェスタの開催で室内楽の高みを目指すとともに、より多くの方々に室内楽に親んでいただき室内楽の裾野を広げるために、以下のような関連事業や広報宣伝活動を実施しました。

アウトリーチ

アウトリーチとは、本来「手を伸ばす」という意味で、音楽家が音楽ホールを出て、音楽を届けることです。今回は第7回大会で優勝したアタッカ・カルテット(アメリカ)が次の学校・病院に行き、演奏したり生徒と合同演奏を行い、交流を深めました。

- 4月17日(月)大阪府立夕陽丘高校
- 4月19日(水)北野病院
- 4月20日(木)帝塚山中学校高等学校



夕陽丘高校で演奏するアタッカQ

審査委員による公開マスタークラス

日本の若手アンサンブルのレベルアップを図るため、世界の第一線で活躍している音楽家が審査に来日している貴重な機会をとらえ、マスタークラスの講師をしていただきました。今回は、現代サクソフォン奏者最高峰の一人のクロード・ドゥラング教授にサクソフォン四重奏の指導(5月13日)を、元東京クワルテットのマーティン・ビーヴァー教授に弦楽四重奏(5月14日)の指導をしていただきました。聴講来場者(2日合計で140名)は、著名な講師の具体的な演奏の指導だけではなく、楽器の奏法にも精通した音楽家に通訳をしていただきましたので、来場者はとても満足されていた様子でした。



熱弁するM.ビーヴァー教授

スペシャル・コンサート

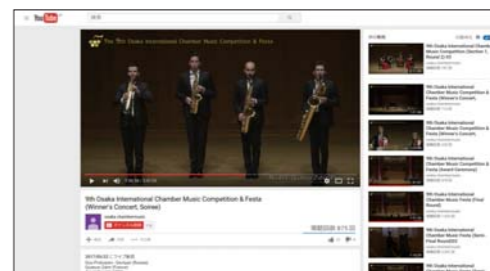
審査委員長の堤剛教授と審査副委員長のミシェル・ルティエク教授が出演するスペシャル・コンサート『華麗なるクインテットの世界』を5月19日(金)に開催しました。二人の外にカルテット・エクセルシオ(第2回大会準優勝)が出演し、五重奏曲の中でも名曲で有名なモーツァルトのクラリネット五重奏曲とシューベルトの弦楽五重奏曲の2曲が演奏されました。東京など遠方からも室内楽ファンがいずみホールに来場し、世界の音楽界を牽引する両巨匠と、当コンクールが輩出した素晴らしい弦楽四重奏団の奏でるアンサンブルを愉しんでいました。



堤審査委員長とカルテット・エクセルシオ

インターネットによるライブ配信

今回もいずみホールで行われたコンクール&フェスタの全ての演奏を配信いたしました。世界各国の視聴者からは、「高音質でレベルの高い演奏をライブで聴くことが出来た」等のコメントを多数いただきました。今回はYouTubeを利用した事により、演奏終了から約2時間後には動画を視聴できるように改善しました。その結果、時差のある海外からの視聴数が特に増え、総視聴数が前回の4倍と大幅に増える事となりました。



クワチュオール・ザイールのライブ配信

大阪、世界最大規模の

室内楽コンクールとフェスタ

American Record Guides
九・十月号より



音楽ジャーナリスト

ロバート・マルロウ

十二の国から集まった二百二十二人の音楽家達による、七つの弦楽四重奏、九つの管楽アンサンブル、加えて様々な編成の十八団体が集結。三十分から五十分の六十八の上演プログラムは、もし全てを聴けば約四十時間にも上る。それが、五月に大阪で開催された第九回大阪国際室内楽コンクールだ。実はこのイベントは、三つのコンクールを一度に開催している。これはおそらく、世界で最も大規模な室内楽のコンクールだろう。

第一部門(弦楽四重奏)

第一部門の弦楽四重奏は、カナダのバンフ、ロンドンのウイグモアホール、そしてイタリアのレッジョ・エミリアの国際弦楽四重奏コンクールと並んで、世界で最も重要なコンクールの二つとなっている。

第一部門の課題曲は幅広く、今回から実施の第三次予選を含め、一次予選から本選まです

べて併せると、圧倒的な量である。二次予選でアメリカのアイズリ・カルテットが演奏したベルクの弦楽四重奏曲には説得力があり、楽譜上の音量記号、表現指示は細部まで見事に表現されていた。第三次予選ではこちらもアメリカのヴィアノ・クワルテットがドヴォルザークの弦楽四重奏曲第四番で、非常に幅広い音量表現、力強いサウンド、主体性が際立たせた。さらにアメリカのユリシース・クワルテットはベートーヴェンの作品三三二を、素晴らしい音量コントロール構成、豊かな表現、そして完璧なアンサンブルで演奏した。

参加した七団体のうち、三つがアメリカの団体だったが、その三団体が本選まで演奏を続け、二位から三位まで全ての賞を独占する結果を誰が予想できただろうか？

第二部門(管楽アンサンブル)

第二部門は木管五重奏、サク

ソフォン四重奏、金管五重奏という三種類の管楽アンサンブルが出演。特にサクソフォン四重奏は、卓越的な団体が参加しており、フランスの二団体、クワチュオール・ザイールとニオベ・サクソフォン四重奏団が際立っていた。彼らは同じ課題曲を演奏し、演奏は甲乙つけ難いものであった。結果両団体は二次予選に進むどころか、ザイールが第一位に、ニオベが第二位に輝いた。管楽アンサンブルはトップレベルの国際コンクールで競う機会が限られている中、六年に一回ではあるが、大阪はそのトップレベルの一つである。審査委員で、ニューヨークワイルの首席トランペッターを三十六年務めたフィリップ・スミスは以下のように語っている。「大阪に来るまで全く予想していなかったが、このコンクールは貴重な経験になったし、とても驚いた。サクソフォン四重奏には、とても圧倒されたよ。私に

できる限り、このコンクールを皆に伝えたいと思う。」

FESTA

大阪のコンクールを特別な存在にしているのは、世界でもユニークな「室内楽フェスタ」である。それはフェスタが、世界中のクラシック、フォーク、伝統音楽のアンサンブルを招いていることで、しかも審査はアマチュアの音楽愛好家の投票によって行われる。選ばれた団体のクオリティは高く、多様性に富み、少なくとも半数は受賞に値するものだった。結果はバヤンとドムラを演奏するノボシビルスクのデュオ・プロコピエフ・タフチャンが勝ち取り、更に伝統音楽で審査員に感動を与えた団体に贈られるフォークロア特別賞も受賞した。この二人は、常に高い音楽



審査員が列をなして投票を行う。

門第一位のアメリカのアイズリ・カルテットのメンバー二人は日本人である。さらに第二部門で二位のフランスのニオベ・サクソフォン四重奏のメンバーの一人も日本人である。独奏者やオーケストラメンバーでは日本人は優れた演奏者であふれていることを考えると、大阪のコンクールでは日本の団体が第一位を受賞するのは時間の問題かもしれない。

アタツカQ大阪を往く

第九回大会プレ事業アウトリーチ・ツアー

音楽ジャーナリスト

渡辺 和

第九回大阪国際室内楽コンクール&フェスタが開幕する数週間前、第七回コンクール第一部門優勝団体のアタツカ弦楽四重奏団(以下Q)による三日間の関西地区アウトリーチが行われた。関西地区を訪れた外国団体がコンサートホールでの公演をしないなど、例がなかるう。広く告知されることないアウトリーチ活動とは、どんなものなのか。

◆四月十七日 夕日ヶ丘高校

アタツカQの面々は前日夕方に北米から関西国際空港に着している。アメリカ国内から日本列島へと至る三週間の長い演奏旅行の真つ最中だ。会場となる大阪市立夕陽丘高校五階ヴィオラホールは、文字通りの音楽ホール。「平成二十九年年度第二会特別公開講座」と題され、卒業生や現役アーティストを招く特別レッスン枠である。開演二時間前、時差もどこへやら、アタツカQは元気に練習開始。演目はハ



アウトリーチの楽器紹介で弓の違いを説明するのは極めて珍しい。

イドン《ラルゴ》第四章、同《皇帝》第二章、シューベルト《死と乙女》第三章、ヤナーチェク《クロイツェルソナタ》第二章、メンデルスゾーン作品三三第三、四楽章。当日配布物は簡素だが、アタツカQには日本語を母国語とするメンバーがいる(第二ヴァイオリンの徳永慶子)。言葉に拠るコミュニケーション問題はない。やがて保護者や関係者も姿を見せ、ホールは百五

十名程の聴衆で埋まる。午後四時、廊下側扉からアタツカQがステージに登場。聴衆から至近距離なので、各メンバーが弓を二本づつ持つているのが良く判る。まずは挨拶代わり、猛烈なスピードで《ラルゴ》フィナーレを披露。自己紹介の後、徳永が曲の紹介を交えつつ演奏する。

音楽部もある高校だけに、西洋音楽や楽器の教養を前提とした親しみやすいが水準の高いMCだ。端正なハイドンが終わるや、おもむろに弓を持ち替え、チェロのアンドリュウ・イーはエンドピンを引張り出す。「こっちがハイドンやモーツァルトの弓でこちらが現代の弓。現代弓は重くて、激しく弾けます。《死と乙女》で、激しい部分と死神の囁きのような中間の甘美な部分が対比される。「大人しくないクラシックです」と《クロイツェルソナタ》の標題を解説し、現代弓の面目躍如と強烈なア

クセントながら破綻のない演奏だ。最後はメンデルスゾーン作品三三後半楽章で、纏まった量を聴かせる。プログラムには記されないモーツァルト《アヴェ・ヴェルヌコルプス》も披露され、最後に《スターウォーズ》組曲を轟かせ、二時間丁度で演奏終了。



学生達の真面目なアンサンブルを真剣に聴くアタツカQ。

終演後は会場を上層階の練習室にかえ、二十名ほどの学生に楽器クリニック。先程ホールで披露されたモーツァルトを選抜の学生五重奏団が演奏、アタツカQは一列目に座つて耳を傾ける。「いつからやつてるの、え、三回目!」と褒めてから始まるのは、弾き方の技術指導ではなかった。「アンサンブルをする上でいちばん大事なことは?」と訊ねる徳永に、「第一ヴァイオリンのエイミー・シュロー

ダーは「聞くこと」と断言。どうしても一生懸命弾いてしまう学生らに、他のメンバーを信じ、最弱音のバスをしっかりと聞き弱音を作る大切さを示そうとする。「お互いの人間関係から聞けるように」、「呼吸が重要」。ヴァイオラのネイサン・シユラムをリーダーに、フレーズを楽器ではなく言葉で作る実験をし、呼吸の合わせ方を経験する。正にアンサンブルのクリニックだ。六時前に恙なく全イベント終了。名残の桜を散らす酷い雨の中を宿に戻る。先程の学生への指導は、レジデンシーを勤めるテキサスの大学でコミニティの合奏団のために屢々行っているやり方とのこと。「アメリカの高校生とはちよつと違いますね」という徳永の感想は、ネガティブな意味ばかりでもない

いようだ。

◆四月十八日 北野病院

大阪キタに聳える北野病院は、三年前にアタツカQ初の大阪アウトリーチでも訪れた場所だ。前回と同じ吹き抜け空間は、エレベーターが忙しなく上下し、院内アナウンスも入りっぱなしの空間で、音は上に抜けてしまいい、条件は厳しい。病院内には告知がされ、一般にも公開



病院の吹き抜けロビーはとても広大な空間で、アタツカQのパワーが無ければ開催不可能かも。

されたパイプ椅子には、三時の開演時間には患者や病院関係者など百名弱の聴衆が座る。

開演の三時、今日も弓を二本抱えて登場したアタツカQはいきなり《スターウォーズ》組曲を広大な空間に響かせ、ロビーを別世界に持ち込んだ。演奏される作品は昨日とほぼ同じだが、

徳永のトークはもつと世間話寄り、音楽や楽器の構造の説明は控えめ。パロック弓に持ち替えてエンドピンを収納したハイドンは、音響条件が悪かろうが、これだけ至近距離での演奏ならやはりフワツとした柔らかな感じが感じられる。会場故かピチカートが強調したベートーヴェン《ハープ》第二章昨日よりも大人向けの標題解説のヤナーチェク《結婚行進曲》をちよつと弾いて、最後のメンデルスゾーン。和声的な響きと線の絡みを古典的に扱う第三章から、フィナーレのロマンティックなエネルギーへの推移は、通常のコンサートと全く同じ精密さで手抜きなどない。

メンデルスゾーンが終わると、きつかり四時。アンコールの《荒城の月》では空調で楽譜が飛んでしまふけれど、気にしても仕方ない。「小児病棟の子供達がヴァイオリンの真似をして帰って行きました」という看護師さんの言葉で充分だ。

◆四月二十日 帝塚山学院

二日続いたアウトリーチ翌日、久しぶりのオフにアタツカQは阪神戦見物に繰り出した。

リフレッシュした四人のニューヨーカーは、生駒山トンネルを越え奈良へ向かう。帝塚山学園に到着、まずは担当の佐藤教諭との世間話。二千名の学生のうち女子はヴァイオリン必修で、シガボールの高校とオーケストラで交流もあるという話にビックリ。

会場はいかにも学校アウトリーチらしい講堂で、総計三百もの椅子が並ぶ。ステージのアタツカQは、響かない会場での音響調整が中心ながら、ベートーヴェン作品二八の二を攫う。二息付くと楽器を持った高校生が入り、クアルテットの後ろに座り、《アイネクライネ・ナハトムジーク》の合奏練習だ。指揮をする佐藤教諭はアタツカQと相談しボウイングを変更したり、



楽器を持った学生らとリハーサル。短いながら修正箇所多数の実践経験だ。

短いながら本格的なオーケストラ練習である。四時から、学生や関係者が客席に付き「アタツカ弦楽四重奏団演奏会」。まずは《スターウォーズ》組曲で、四人でもオーケストラのようなパワーで圧倒。徳永の話への反応も良い。《皇帝》と《死と乙女》のメヌ



特別な音響設備はない講堂も、アウトリーチ慣れたアタツカQには手慣れたもの。

エツトの聴き比べでは、弓とエンドピンの話を交え、サラリと面倒な音楽史の話を交える。アンコールの作品一八の二は、これぞ弦楽四重奏とばかりに各パートが明瞭に鳴った。そして、学生アンサンブルとの合同演奏。全ての作業を終えると五時半を過ぎ、春の曇り空も黄昏れる。山を越えれば、食い倒れの街の夜が広がっている。ツアーを終えたアタツカQに、感想を語っていたところ。「夜の演奏会終演後は多くのレストランは閉まっています。今回は良いものを食べられました(笑)。夜に演奏会があると昼間のアウトリーチに割くエネルギーはどうしても小さくなって

しまうので、今回のように学生や病院に百%の芸術的配慮を出来るのは有り難いです。」(シユラム) 「病院や学校の訪問は、文化のまるで異なる側面を見ることになります。人々をホントに個人として見るなど、普通は音楽家にはない視点です。コンサートに来ると限らないけれども、でも音楽を愛する人々に出会える。」(イー) 「いろいろな曲を紹介出来て、上手くいったと思いますよ。」(シユローダー) 「若い頃、ジュリアード音楽院から遣わされ、ノースキャロライナ州にあるヒッコリーという街で一週間、一日三件もアウトリーチをしました。アウトリーチは弾く側の情熱が伝わらないと意味がありません。ヘトヘトになつてしまつと、せつかく行つても音楽の楽しさや私たちの情熱が伝わらない。意味のない行爲になつてしまったのじゃないかな、とも今は思えます。今回のような形でやれたのは、とても良い経験でした。」(徳永)



音楽雑感



同志社女子大学学芸学部音楽学科教授
 「得意種、いなりますけ」プロフィール
 東京大学大学院博士課程満期退学、二一三大学哲学科博士課程修了、東京大学助手、パリ第三大調師リール第三大調師を経て、現在は同志社女子大学教授。著書「テオタドセヴラック―南仏の風、郷愁の音響」(フルテス・パブリッシング)で第二十回吉田秀和賞受賞。その他の著書に「音楽的時間の変容」(現代思潮新社)、「狂気の西洋音楽史」(岩波書店)などがあがる。

椎名 亮輔

今夏もまたパリに滞在し、フランスの現代音楽作曲家リュック・フェラーリ(一九二九〜二〇〇五)伝の基礎研究として、彼と

いろいろな意味でかわりあつた人々にインタビューをしたのであった。念のために再び言うが、このプロジェクトは同志社女子大学から研究助成金の交付をうけ、二昨年度から始まり、今年が三年目である。

今までにインタビューした相手は、二年目が、映画作家・画家のジャック・プリソ、作家・骨董商のフィリップ・ミュクセル、シャンソン歌手・作曲家のダヴィッド・ジス、作曲家でG R M会長のダニエル・テルツジ、作家・評論家のアレクサンドロ・メルクリーと、イタリアのレコード会社経営のアントレア・チエルノットの六名。二年目の去年が、作曲家のフランソワ・ペール、フランス国営放送技

師のアリス・ベルジエ、評論家映画監督のジャクリヌ・コー、音響技師クリストフ・ハウザー、政治学・社会学者のアンヌ・ミュクセルの五名だった。

今年も、ターンテーブル奏者で造形作家でもあるeRikm、音楽学者・作曲家・ピアニストのアンリ・ワレス、女優・歌手のエリーズ・カロロンにインタビューした。当初は、ピアニストのミシェル・モレルへのインタビューも予定に入っていたのだが、彼に突然の地方公演依頼が入ったために直前にキャンセルになってしまった。その代わりと



eRikm

いつはなんだが、昨年にもインタビューした、フェラーリ・アーカイブのすべてをデジタル化したアリス・ベルジエさんに、フェラーリの仕事場であったスタジオ・ポスト・ピリッヒとモン

トルイユの自宅において(つまりさまざまな資料とくに録音テープとともに)、フェラーリの仕事の方法の詳細をきいた。さて今年のインタビュー相手は、しかし、二名がパリではなく地方在住という問題点があつた。マルセイユに住むeRikmと、リヨンに住むアンリ・ワレスである。だがさいわいなことに、これはまったくの偶然なのだが、八月中はフランス全体がヴァカンス中であり、ふだんはリヨンに住んでいるワレスが休み中は

別荘のあるエクス・アン・プロヴァンスに居を移していたのである。そしてまた、その別荘がエクス市内ではなく、マルセイユ寄りであつた。これにより

具体的には、まずマルセイユでeRikmにインタビューし、その後(おお、なんと親切なこと!) eRikm本人がエクス近郊のワレスの家まで、わたたくしを車で送ってくれるということになったのである。(そしてまた―なんと親切なこと!―ワレスはわたたくしを彼の別荘に泊らせてくれ、翌日にパリに帰るといふ旅程を可能にしてくれたのだつた。)



ワレスの別荘、遠くにセザンヌの絵で有名なサント・ヴィクトワール山が見える。

前者における共演は二〇〇二年にはじまり、いくつかのヴァー

ジョンがあるのだが、とくに二〇〇四年ミラノでの演奏はその録音

音がレコード大賞を獲得するほどの名演であつた。しかし、この二枚のCDといくつかのLPのための作品は、LP部分だけがDJにまかされ、CD部分はす

ワレス。彼へのインタビューは前述のように彼の家に二泊でき

たために、翌日の午前と午後二回にわたって行われた。午前中は彼とフェラーリのコラボレーションについて。それは六つあつて、(一)《アイネイアスを持ちながら》(一九八二?)、(二)《作曲のレッスン》(一九九二)、(三)《伝統の書》(一九九三)、(四)《北風

をつらぬくという形で共通項があつたことが語られた。

パリに戻り、エリーズ・カロロンに話を聞く。フェラーリとの出会いは一九八〇年のジスの映画で歌ったときだが、実際のコラボは八



エリーズ・カロロン

三年の《日記》が最初である。彼女はノルマンディー出身、はじめパリ音楽院で歌を学んでいたが、女優として活動を始める

に自然なことだつたという。最後は再びアリス・ベルジエ。彼

女は実際の録音テープを見せながら、フェラーリの仕事の手順を説明してくれた。まずそれぞれの作品について材料となる音声素材テープがだいたい五巻から十巻多いときには二十巻以上あり、それぞれがひとつのシチュエーションでの録音で三、四十分間のもの。これらをもとにミクシング、モニター・ジュして、実際に作品に使用される



アリス・ベルジエ、後ろはフェラーリの残した膨大なテープ

これはフェラーリと「即興」について考えるときの非常に重要な要素となると思われる。



アンリ・フェーレス

さて次はアンリ・

の話を、彼へのフェラーリの影響について、二人には二十歳近く年齢の差がありながらも音楽にたいして自分のやりたいこと

さてこうして今回も大変に実りの多い旅となつた。これからの課題は、足りない部分を補いつつ、いかにこの成果をまとめて行くかということになる。目的は遠い。



公益財団法人日本室内楽振興財団 支援企業



大阪ガス株式会社
関西電力株式会社

アサヒビール株式会社
サントリーホールディングス株式会社
ハウス食品グループ本社株式会社

非破壊検査株式会社

大塚製薬株式会社
住友化学株式会社
積水化学工業株式会社
武田薬品工業株式会社
日本ペイント株式会社

住友電気工業株式会社
ソニー株式会社
株式会社東芝
日本電気株式会社
パナソニック株式会社
株式会社日立製作所
富士通株式会社
ローム株式会社

東洋紡株式会社
株式会社ワコール

近畿日本鉄道株式会社
京阪電気鉄道株式会社
南海電気鉄道株式会社
西日本旅客鉄道株式会社
阪急電鉄株式会社
阪神電気鉄道株式会社

株式会社近畿大阪銀行
株式会社みずほ銀行
株式会社三井住友銀行
三井住友信託銀行株式会社
株式会社三菱東京UFJ銀行
株式会社りそな銀行

伊藤忠商事株式会社
岩谷産業株式会社
株式会社千趣会
三菱商事株式会社

株式会社JTB西日本
株式会社電通
株式会社ニュー・オータニ

住友生命保険相互会社
東京海上日動火災保険株式会社
日本生命保険相互会社
三井生命保険株式会社

株式会社日建設計

KDDI株式会社
西日本電信電話株式会社

野村證券株式会社

株式会社大林組
鹿島建設株式会社
株式会社きんでん
株式会社鴻池組
清水建設株式会社
大成建設株式会社
大和ハウス工業株式会社
株式会社竹中工務店

株式会社読売新聞大阪本社
株式会社読売新聞東京本社
日本テレビ放送網株式会社
読売テレビ放送株式会社

(関連業種別50音順)

平成29年度 第1回理事会開催



理事会

平成29年度第1回理事会が、平成29年6月7日(水)ホテルニューオータニ大阪で開催され、森会長の挨拶の後、望月理事長が議長となり、平成28年度の事業報告並びに決算報告が審議され可決承認されました。また、平成29年度定時評議員会の招集と議題についても可決承認され、最後に事務局から5月に開催された「第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」についての報告がありました。

平成29年度 定時評議員会開催



評議員会

平成29年度定時評議員会が、平成29年6月26日(月)ホテルニューオータニ大阪で開催されました。望月理事長の挨拶の後、評議員の互選で牧野明次評議員を議長に選出、先の理事会で承認された平成28年度の事業報告並びに決算報告が可決承認されました。評議員3名及び監事1名の選出についても可決承認されました、最後に梅本音楽評議員から5月の「第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」について実施報告がなされました。

新任評議員 後藤 俊行(清水建設) 河内 克樹(日本電気)

篠永 正徳(三井住友信託銀行)

新任監事 木瀬 浩平(読売テレビ放送) (敬称略、企業名50音順)

CONTENTS

| | |
|--|-----------------------------|
| 第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 写真集...1 | アタッカQ大阪を往く |
| 座談会 | ～第9回大会プレ事業アウトリーチ・ツアー～ |
| 第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタを振り返って | 渡辺和13 |
| 司会:玉越邦彦 | 音楽雑感 |
| 出席者:澤和樹 タレイア・クアルテット(山田香子/大澤理菜子/渡部咲耶/石崎美雨)3 | リュック・フェラーリ関連人物インタビュー(続) |
| 第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ開催報告 | 椎名亮輔15 |
| グランプリ受賞団体7 | JCMF NEWS17 |
| 審査総評/フェスタの魅力10 | 公益財団法人日本室内楽振興財団支援企業18 |
| コンクール関連事業と広報宣伝活動11 | |
| 評論記事12 | |

表紙は「第9回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」優勝団体上から 第1部門:アイズリ・クアルテット
第2部門:クワチュオール・ザイール
フェスタ:デュオ・プロコピエフ・ダフチャン

グランプリ・コンサート2017

アイズリ・クアルテット (アメリカ)

Aizuri Quartet



「グランプリ・コンサート」は、3年ごとに開催される「大阪国際室内楽コンクール&フェスタ」の優勝団体を毎年部門ごとに招いて、日本各地で公演を行っています。今年は5月に開催された「第9回大阪国際室内楽コンクール」の第1部門で優勝したアメリカの「アイズリ・クアルテット」による全国9会場での公演が予定されています。

■開催日程■

| | | |
|-----------|----|----------------------|
| 11月 8日(水) | 富山 | 高岡文化ホール |
| 11月10日(金) | 大分 | くにさき総合文化センター アストホール |
| 11月12日(日) | 熊本 | 益城町文化会館 |
| 11月13日(月) | 大阪 | いずみホール |
| 11月15日(水) | 鳥取 | 鳥取市文化ホール |
| 11月16日(木) | 広島 | 庄原市民会館 |
| 11月19日(日) | 三重 | 三重県文化会館小ホール |
| 11月21日(火) | 横浜 | 横浜市鶴見区サルビアホール3F音楽ホール |
| 11月23日(木) | 東京 | トッパンホール |

■全国共通■

- 主催/ 公益財団法人 日本室内楽振興財団
- 協賛/ **ダイワハウス**
- 助成/ 公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション
- 協力/ 野村證券株式会社



感動のそばに、いつも。

心奪われるような 感動を胸に！

世界にはその土地でしか出会うことのできない
美しく、魅力的な、情景があります。
日本では味わうことができない、
TVや映画の映像では満足できないものばかりです。

心奪われるような感動を
体験してみませんか？

まるであなたが旅の主人公になったような・・・
特別な時間を過ごしていただくお手伝いを
私たちJTBは致しております。

JTB西日本 海外旅行西日本支店

〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 (MPR本町ビル9階)

TEL.06(6252)2711 (代) FAX.06(6252)2790

担当:有野 良一

●編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見2丁目2番33号 読売テレビ内

TEL.(06)6947-2183 FAX.(06)6947-2198

ホームページ <http://www.jcmf.or.jp>

e-mail zaidan@jcmf.or.jp

Vol.48

平成29年10月31日